



TITLE:

# マルクス氏の集産主義の實行難を論ず(一)

AUTHOR(S):

田島, 錦治

---

CITATION:

田島, 錦治. マルクス氏の集産主義の實行難を論ず(一). 經濟論叢 1922, 15(3): 315-333

ISSUE DATE:

1922-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127945>

RIGHT:

# 會學濟經學大國帝都京 叢論濟經

號三第 卷五十第

行發日一月九年一十正大

## 論叢

マルクス氏の集産主義の實行難を論ず

法學博士 田島 錦治

交通税の本質

法學博士 神戶 正雄

階級に就いて

文學博士 高田 保馬

基督教文明の發展概論

法學博士 財部 靜治

社會哲學の於主意的二元論的思想

法學士 恒 藤 恭

## 時論

財産税論

法學博士 小川郷太郎

## 資料

小作爭議原因の研究

法學博士 戸田 海市

## 雜錄

フーガスの本能的社會觀

法學博士 河上 肇

我國の離婚率に就て

經濟學士 岡崎 文規

定價制と正價制

法學博士 河田 嗣郎

# 經濟論叢

第十五卷 第三號 (通卷第八十七號)

大正十一年九月發行

論

叢

## マルクス氏の集産主義の實行難を論ず (一)

田 島 錦 治

- 一、緒論、マルクス主義及び集産主義の説明、マルクス主義の學理的并に實行的方面の弱點
- 二、純正集産主義者の其主義實行の設計に就ての沈黙、ロードベルツス、ワイトリンク、シエフレール、ジョーレ氏等の集産制社會の設計

三、純正集産制の設計の主要の説明

四、集産主義の價值論の集産制社會に於ける適用、此適用に關する種々の衝突及び困難の説明

マルクス主義とは、カール・マルクス氏の唱ふる所の社會主義にして、此派に屬する者は自ら稱して、科學的社會主義といひ、他の者は之に純正集産主義の名を與ふ。純正集産主義即ち佛語の *le collectivisme pur* は「一に完全集産主義 *le collectivisme total* なもといひ、部分的集産主義

即ち *le collectivisme partiel* に對する名稱なり。

純正若くは完全集産主義と、部分的集産主義とを甄別する所の標準は、前者に於ては謂はゆる生産方便の總て(即ち土地及び資本)を社會の公有と爲さむと欲し、後者に於ては生産方便の一部(即ち土地のみ)を社會の公有と爲さむとするに在り。獨逸のラッサール及びマルクスの主義は前者に屬し、白耳義のコリンス(Colins)及び米國のヘンリー・ジョージ(Henry George)の主義は後者に屬す。

抑も此コレクチヴィズムの名稱は、マルクス自身の用ひざりし所なり。氏は其有名なる「共產主義宣言」に於てはコムニユニズムの語を用ひたり。蓋しコレクチヴィズムの語は白耳義のコリンスが千八百五十年に用ひたるを始とす。然れども氏の集産主義は、前述の如く部分的にして特に農業に關するものなるが故に、一に農業的集産主義 *le collectivisme agricole* の名稱あり。集産主義を最も能く代表するはマルクスなり。余は本論に於ては、マルクスの完全集産主義に就て、特に其實行の困難及び弊害に就て考察する所あらむと欲す。

マルクス派は自から稱して科學的社會主義といふと雖も、其説が學理上許多の誤謬及び矛盾より成り、特にマルクス主義の樞軸とも謂ふべき價值及び餘剩價值の説が、恰も殘壘廢墟の如く、今日に在りては單に經濟學史上の參考資料たるに止まるは、苟も少しく輓近の經濟學理に通ずる

者の皆知る所なり。然るに近年我國に於て、マルクス主義を宣傳鼓吹する者甚多く、名を解釋に假りて、實は之を勸奨し、經濟學の素養なき多數の青年、勞働者、無産者をして誤て之を眞理と認めしめ、其實行は禍を轉じて福となし、人類を經濟的並に道德的に向上發展するものなりと妄信せしむるを致せり。

特に知らずや、マルクス主義は皆に其學理上の根據に於て動搖し顛覆したるのみならず、其實行的方面に於ては亦避くべからざる至重の困難ありて、寧ろ實行不可能と謂ふを適當とすべく、縱令之を實行し得たりとすれば、却て弊害百出、結局得る所は失ふ所を償ふに足らざるものなることを。諺に謂ゆる「言ふは易く、行ふは難し」とはマルクス主義に就ても亦爾か云ふを得べきなり。マルクス主義の學理上の誤謬は、夙に諸經濟學者の指摘論評する所にして、マルクスの徒弟亦之に屈從するに至れるは、ベルンスタイン (Burnstein) の代表する改革派 (reformistic) の變説は正に之を證明す。而してマルクス主義の實行の困難又は不可能は、實行方面に關してマルクス等の沈黙を守るに由りて恰も之を裏書するものと謂ふべきなり。

余は屢々本誌に於て、マルクス主義の學理上の誤謬を指摘論評し、特に第十四卷一號三號四號 (大正十一年一月三月及び四月刊行の本誌) に於てマルクスの餘剩價值説を論評したり。此等の諸論文は素より余の創見を發表したるものに非ず。泰西學界に於て既に殘壘廢墟となりたるマルク

ス主義が、近年我國に移築せられむとするを見るや、其經濟學に素養なき青年を誤導するを恐れ、聊か所信を披瀝したるのみ、余豈辯を好まむや。而して今や再び本論に於て、マルクス主義の實行難又は不可能を論ぜんとす。此點も先輩學者の多年研究論述せる所なれども、我國の現狀に照せば、多數の勞働者無産者にしてマルクス主義の實行を以て天國の再來の如く妄想する者あるが故に、茲に此點を論述するは、謂ゆる症に對して藥を施すの類なり。其藥の陳と新とは必ずしも多く問ふを要せざるべきなり。

## 二

純正集産主義 (le pur collectivisme) の特色は二あり。生産、循環、及び交易の方便は總て國民社會に屬し、其支配の下に運用せらる、是れ其一なり。總ての事業及び生産物は之に費されたる勞働の量に従ふ所の勞働單位に由りて定められたる價值を有し、從て勞働者は生産物を彼等の勞働に比例して受くるを得、資本主の剝奪を免る、是れ其二なり。

純正共產主義を實行する社會の設計は上述の如し。而して其細目に至りては此主義の祖師も其門弟も、多くは默して語らず。マルクスは現時の資本主義社會の短所弱點を指摘攻撃するに全力を傾注し、寸毫も假借するなきの概あり。然れども未來の社會の解説は、其常に避くる所なり。

ルロワ・ボーリユーは此事を批評して、マルクスの資本論は、宜しく其卷頭にゲーテが惡魔メフィストフエーレス (Mephistopheles) を形容せる語即ち *ich bin der Geist der stets verneint* (余は常に何物をも否定する靈魂なり) を掲ぐ可しと言へり。蓋し酷評に非ざるなり。(Leroy-Beaulieu, *le Collectivisme*, 5<sup>e</sup> éd., 1909, p. 325)。マルクスは其「資本論」に於て、價值及び餘剩價值の説を爲し、現時の社會に於て、賃銀勞働は資本主に無償なる餘剩價值を與ふるものなるを論ず。氏は生産方法の歴史的進化を述べ、産業並に富の集中は結局資本所有者の資本の公用徴収となり、總ての生産方便(土地を含む)は社會の所有し、運用する所と爲り畢るべしと論じたり。

マルクスの好敵手たる社會主義者ラッサールの如きも其主義の實行方面に就ては、多くを語らず、唯國家の補助を受くる勞働者生産組合に就ての大綱を示すに止まれり。而してマルクスの門弟等は亦師の沈黙に倣ひ、而かも沈黙を以て理論上當然の事と思考したり。ガブリエル・デヴィルは曰く『何れの時節にも其時節の仕事あり、吾人は宜しく現在に處するを勉むべきのみ、何ぞ未來を慮るに遑あらむや』(Gabriel Deville, *Principes socialistes*, p. 38 et 39, Giard, 1898)。ホーブクネヒトも亦同様の宿命主義を有し、即ちコスモポリ誌に「未來國」の標題を以て載せたる文中に於て、未來社會の圖形を表はす能はざるを自白せり。其理由とする所は、人生は一寸先は闇なること、時は常に移り行きつゝある故に、現在と未來との限界は之を定め難きこと等なり。(Lieb-

knecht, *Zukunft-staatliches, Cosmopolis*, Januar, 1898.)

ヴァンデルヴエルトは千八百九十五年白耳義ブルユッセル市の一新聞より、集産主義の社會の機關を叙述せむことを需められて、之を拒絶したり。其理由は實證的社會主義(les socialistes positivistes)なりとも、俄に新設計に依りて社會を改造せんと欲する社會的建築家(architectes sociaux)には非ずといふに在り。(Destrès et Vandervelde, *Le Socialisme en Belgique*, p.290. Giard, 1898.)

カウツキーの説に従へば、未來國の設計は不要なり、何となれば、國が完全なる一大經濟團體に變形することは、啻に望ましきのみならず、避く可からざる必至の事なればなり。思想家は幾分か此經濟的變動の方向を認知するを得べしと雖も、彼等の欲するまゝに之を定め、又は其取所の形式を確實に豫見するを得ず。故に社會主義者に向て未來國の設計、又は變革の方法を叙述せんことを求むるは愚なりと。(Karl Kautsky, *Das Erfurter Programm*, S.131. Stuttgart, 1892.)

社會主義者の種々の會議に於ても、マルクスの與へたる文例を襲蹈し、例へば千八百九十一年の獨逸社會民主黨のエルフルト會議の綱領アゴララムの如きは是なり。曰く『社會的勞働の大なる使用及び常に増加する生産力が、從來剝奪せらるゝ諸階級(勞働者を指す)に向つて困難及び抑壓の原因たることは止みて、すべての意味に於て、至極なる善及び完全なる福と成る爲には、只資本主の私有財産たる生産方便、即ち土地、鑛山、原料、器具、機械、運輸機關を社會の公有に變じ、及び商



業的生産を、社會の爲に社會に由りて行ふ所の社會的生産に更むるより外あらす」と。又千八百九十九年十月「ハノヴァ」會議も亦同例にして、同會議はベーベル氏の提議に由り、其決議條項として、生産方便の社會化及び社會主義的生産及び交易の方法の設定を記載す。然れども此生産及び交易の方法に就ては、毫も指示する所なし。

夫れ斯の如く、マルクス等集産主義者は、總ての生産方便が社會の公有に歸し、總ての生産事業が社會の公營に歸することを必至の運命と思考し、社會進化の理由に従ふ當然の結果と論斷するに止まり、未來の社會の組織及び其富の生産交易及び分配の方法に就ては、或は默して言はず或は語りて詳ならず。只輓近に迫りて、佛國のジョウレ氏(Jaurès)は千八百九十五年アンリ・ブリサック氏の著書 (*La société collectiviste*, d' Henri Brisac, 3<sup>e</sup> éd, 1895) の序文に書して『翌日吾人は何となるかと吾人に問ふ者あらば、吾人は之に答へざる可からず』 (*A ceux qui nous demandent: que serons-nous demain? nous devons une réponse.*) と曰へるは、實に此派の從來の態度を一變したるものと謂ふ可きなり。果然ジョウレ氏自身が千八百九十五年に公にせる「Organisation socialiste」と題する書は、集産主義を以て現時の資本主義の制度に直接に代るべき運命を有するものとして説明せるものなり。此書に於て、ジョウレ氏はマルクスの勞働時間は價值を測定すとの理論を忠實に守れども、財貨の生産に就ては生産者の諸集團に對して特定の自治を與ふべしとの

折衷意見を含むものなりとす。

然れども、集産主義の方法を示せる最初の論文は、遙か以前に現はれたり。社會主義のリカードと稱せられラツサールの師にして、而かもマルクスの先輩たるロードベルツスの論文は其一例なり。氏が千八百四十二年に著したる *Zur Erkenntniss unserer staatswirtschaftlichen Zustände* (S. 119-125, u. 165-175) は純然たる抽象的性質を有するものなるが、此中に勞働に本づく價值の原理を論じ、此原理を應用する假定的社會に於ては、私人的所得を生すべき私人の財産無く、資本なく、社會的資本の唯一の所有者たる國家は總ての生産を管理し、各勞働者は公共的倉庫に就て、社會的生産物の彼の分前を、彼の勞働に由りて生ぜしめたる價值を表示する所の手形を以て引出すことを説明したり。又氏は千八百五十二年に草したる「フオン・キルヒマンに與ふる第四の社會的書簡」即ち氏の死後十年の千八百八十五年に「資本論」の名稱を以て出版せられたる書中に於て、此意見を述べ、而かも謂ゆる假定的社會の現出は尙ほ遠き將來に在るべきを思考したり。

同じく獨逸人ウイヘルム・ワイトリング(Wilhelm Weitling)が亦同じく千八百四十二年に著はせる書中に、半ば共產的にして、半ば集産的な社會の設計を公にし、アントン・メンガー氏は之に對して短評を下せり。(Weitling, *Garantien der Harmonie und Freiheit*, 1. Aufl. 1842; Ant.

Menger, *Le droit au produit intégral du travail*, trad. Bonnet, p. 229-231, (Gard. 1900.)

純正集産主義の設計の説明は、シエッフレー氏の千八百七十四年に著はしたる小冊子「社會主義の精髓」(Schäffle, Quintessenz des Sozialismus)を最も有名とす。其他米人ベラミー氏が千八百八十八年に公にせる有名なる小説 (Bellamy, *Looking Backward*) モハリス氏の小説 (William Morris, *News from nowhere*, 5ed. 1897) 獨人ビーベン氏の「女及び社會主義」と題する著書 (Bebel, *die Frau und der Sozialismus*, 10te Aufl. 1891) の如きは皆集産主義の設計を示すものと謂ふべしなり。

此等に次で現れたるは前述ジョウレ氏の「社會主義的構造」なり。此書は尙ほマルクスの労働價値説を維持したれども、之に次ぎて現はれたる米人 Gronlund や、瑞西人ズルツェルの著書は、集産主義の主張の下に、需要供給の理論の一般的適用を試みつつあるものにして、マルクスの労働時間をも以て價値の唯一の測度とする意見に多少の變改を加へたるものなり。(Gronlund, *The cooperative Commonwealth*, London 1896; Sulzer, *Die Zukunft des Sozialismus*, Dresden, 1899.)

斯の如くマルクスの後繼者が其根本原則に對して多少の折衷變改を試むるに至れるは、マルクス主義の實行難を暗示するものと謂ふ可し。余はジョウレ等の折衷變改説を批評するに先だち、マルクスの純正集産主義は如何に實行せらるべきか、之が實行に伴ふ困難弊害は如何の問題に就

て詳論する所あらむと欲す。

### 三

集産制度の實行せらるゝ社會とは、如何なるものなりや。曰く是れ一の國民的生産の秩序ある組織にして、社會の公有となりたる自然的生産要素及び生産的資本を以て行はるゝものなりとす。公權即ち集産的社會の國家は、統計に因りて、國民全體の消費すべき物を前知し、あらゆる財貨の生産、運輸、貯藏、及び販賣を掌るものなり。公權は各労働者に酬ゆるに、其生産に給付したる平均性質の労働の時數に従ひ、社會的價値の單位の若干を以てす。例へば靴一足を作るに、五時間の平均性質の労働を要するときは、労働者は五單位の價値を表示せる手形を受くるなり。之と同様に、公權は諸生産物の價値を決定するに、其等の生産に要したる平均労働の時數を以てす。例へば五時間の平均労働を要したる靴一足の價値は五單位なるが如し。斯くして生産せられたる諸物品は公共倉庫に收納せられ、而して労働者は其労働に由りて得たる價値諸單位の手形を以て、公共倉庫に就て、其欲する所の物品と引換へ、之を獲得し、消費するを得るなり。

正確に言はゞ、前述労働の報酬より國家を維持する費用、及び社會資本増加に充つる額、即ち謂ゆる集合的欲望に向つての費額に對して或特定の控除を爲さざるべからず。此控除を別として、

概して労働の報酬は生産物の價値に均しきが故に、現時の經濟社會に存在する所の利子、配當利益、賃借料、小作料等の名義を以てする控除にして、謂ゆる資本主階級の利得となる所のものは全く無くなるべし。換言すれば、現今の謂ゆる利潤も又勞賃も無くなり、資本主と賃銀労働者との區別は無くなるなり。又個人間の交易も私人的商業も無くなり、只公共倉庫又は公共販賣所に於て財貨の販賣せらるるあるのみ。從て貨幣は其正貨たると紙幣たるとを問はず、其語の現時の意味に於けるものは無くなるなり。銀行、取引所、投機業、私人の貸借、公債、營利的保險業は資本の利子及び交易と共に廢絶すべし。斯くして現時見る所の各生産者間に於ける不統一の競争 (la concurrence anarchique) は止み、從て恐慌、失業、過剰生産の諸現象は絶ゆべし。是に於て、社會は意識的に組成せられ及び支配せらるゝ一大經濟團體と爲り、其内部に於て總ての公民は其能力に應じて勤務を爲すを得、雇主被雇者の別は止み、働く人は其働に應じて、其働の全生産物 (若くは其價値) を取得し、只社會團體が公共的經費を維持し及び社會的資本を増加する爲に必要とする部分を控除するに過ぎざるなり。之を要するに、集産主義の目的は労働の單位を基礎とする價値の決定に由りて、労働と生産物とを直接に交換せしめ、斯くして資本主の餘剩價値を絶滅し、財貨の分配をして謂ゆる『各人に其勞に應じて』の主義に由らしむるに在るなり。故に此制度の下に於ては何人も其貯蓄したる労働手形又は享受財を他人に利貸するを得ず。若し慈善親切

の名義に隠れて實は利貸を爲す者あらば、公權は之を嚴重に査問し又は處罰せざる可からず。何となれば若し一たび利貸を寛假せんか、謂ゆる千丈の堤も蟻蟻の一穴より壞るる譬の如く、餘剰價值は再現し、集産制産は破壊すべければなり。

夫れ勞働を以て價值の唯一根源と爲し、勞働者の無償勞働の生産物即ち餘剰價值を以て資本成立の唯一原因と爲す説の學理的誤れるは、余の前論文に於て屢々論評したる所なり。而して今や集産制の實行方面に就て再び此價值の單位を考察する所あらむと欲す。何となれば平均勞働の時を單位とする價值は即ち勞働並に其生産物の價值にして、集産制の社會に於ける生産分配及び消費のあらゆる方面に對し、最も重大なる關係を有すればなり。

#### 四

勞働は價值の實質にして、且其測度なりとの考は、嘗て英國經濟學者例へばアダム・スミス及びリカードに由りて唱へられたる所にして、近代の社會主義者は總て之に従ひ、而してマルクス亦之に依りて現時の經濟現象を説明せむと試みたるものなり。(資本論第一卷)。此説は未だ以て現時の社會に於ける財貨の價值を説明する能はざるは、余が前論文に於て屢々指摘したる所なり。然れども此説を集産主義の社會に當拊むるときは如何。

シュフレー氏の假定に従へば、若し一社會が一箇年に要する總ての財貨を生産する爲に二十四億時間の労働を要するときは、之に相當する價值單位の數を労働手形を以て労働者に交付するを要すべく、斯くして彼等は公共倉庫に就て恰も二十四億時間の労働を直打する所の全生産物を買ふことを得べきなり。各労働者は其労働時數に應じて、若干の労働手形を受く、而して各生産物の價值は恰も其生産に要したる労働時數なるが故に、公共倉庫に貯在せる生産物の總價值は、公權が發行して労働者に交付したる労働手形の表示する所の總價值と恰も相平均して、過不及なきを得べきなり。ロードベルツス氏が労働手形を以て『これは完全なる貨幣なり、即ちこれは其表示する所の價值が實地に存在するときのみ發行せらるゝが故に、價值の絶對的測度を與へ、及び絶對的確實性を供するものなり。これは現行の金銀貨の如く自身に擔保を有するものに非ず、又多くの銀行紙幣や、信用證券の如く擔保を缺くことあるが如きものにも非ず。これは自身に價值を有せざれども、而も常に實際に存在する價值を擔保とする所の特殊の貨幣なり』と曰へるは、少しく溢美の嫌はあれども、労働手形の性質を善く説明したるものと謂ふべからず。(Rodbertus, *Le capital*, trad. Chateletain, p. 130.)

此兩種の價值の單位數、即ち労働手形の表示する價值單位の總額と、生産物の價值單位の總額との間に常に嚴重なる平均の保たるゝ事は、此集産制の實行上最も必要なりとす。蓋し理論上よ

り言はゞ此平均は必ず保たるべし、何となれば勞働及び其生産物を評價する者も、消費の目的物を賣る者も同一の公權なればなり。然れども實行上に於ては無數の困難障害あり。先づ簡單なる例を擧げて漸次に之を説明すべし。

一の机が二十時間の勞働を要したり。一時間は伐木の勞働に、四十五分は木の運搬に、十八時間は製作の勞働に、十五分は生産上種々の過程に使用せられたる道具機械の消耗せる部分を作る勞働に費やさると假定すべし。然るときは此机は一時間の勞働手形二十を直打すべし。此例に於て最後に机を仕上たるは指物師にして、十八時間働きたるが故に、公權は彼に勞働手形十八を與へ、而して机の價值二十と此十八との差の二は、樵者、運搬者、道具機械製造者に前以て與へたる分前の補償と爲すを要す。尙茲に考慮を要するは、生産物の價は啻に肉體的勞働者の勞働時間を含むのみならず、精神的勞働を提供する所の管理者又は其他の役員の勞働時間をも含むべし。然らば、前例に於て指物師が十八の手形を全然獲得するは果して正當なりや。

夫れ社會共同の欲望に對する經費は、社會主義の殆んど總てが承認する所なり。集産制の社會は啻に其磨損消耗する所の生産方便を再び作りて、之を維持するを要するのみならず、其資本を増加せざる可からず。此他社會の安寧、秩序、保健、教育、經濟的行政に要する公費及び幼老病者不具者等働く能はざる總ての公民を維持する費用の缺く可からざるは勿論なりとす。而して此



等の費用を供ふる爲には、社會收入中より莫大の控除を爲すを要す可し。集産制の公權は租税に依るを好まざるが故に、勢、各労働者の各生産物の價より控除することゝなるべし。而して此控除たるや、資本の減價補充又は運搬費と異なり、價値の増加に全然一致するものに非ず、從て労働者の分前を減少するものなり。今若し此控除にして労働の生産物價値の三分之一を要すとすれば、前例に掲げたる指物師は十八時間の労働に對して、只十二時間丈の労働手形を得るに止まるべく、而して六時間は集産社會の共同體の利得に歸すべきなり。果して然らば労働者は其労働の對價の總てを得ざるることゝなるなり。

次に考慮を要するは、同時間の労働は必ずしも同量又は同價の労働に非ざるの點なりとす。社會主義者は皆齊しく此點に注意し、以爲らく、各生産者の提供する労働の量は、啻に其時數に由りてのみ之を評價するを得ず。怠慢未熟なる労働者の労働は勤勉熟練なる労働者の労働と同一の労働量を示すものに非ず。故に労働量を計算するには、労働の烈度（勤勉度）及び能度（熟練度）の社會的平均を定め、而して各人の労働を評價するには其労働の烈度及び能度の其結果に現はるゝ所のものを計算に入れて適當に加減するを要すと。例へば草履を作る労働の社會平均が一時間二足なる場合に、甲は一時間に四足を作り、乙は一足を作りたるときは、同じ一時間の労働に對して、甲は二の手形を受け、乙は半分の手形を得るに過ぎざるべし。蓋しあらゆる種類の職業に就

て、各労働の社會平均を定むるは決して容易の事に非ず。而して同種の労働に就て各労働者の同一の労働時間に向て、前述の如き差別的評價を爲すは亦種々の困難を伴ふ可し、何となれば労働の烈度及び能度の差異は、常に生産物の分量の上にのみならず、其品質の上にも其効果を現はすべければなり。例へば前例に於て、甲は一時間に堅牢美麗なる草履を二足作り、乙は至て粗末なるもの二足作りたる場合に、公權は何を標準として此等を評價せむとするや。

同種の労働に就て社會平均單位を計算するに尙一の困難は、生産の自然的要素原料及び生産要具が甚しき異同あることなり。同一の烈度及び能度を有する同時數の労働と雖も、土地の肥瘠其他自然的條件の優劣、原料の良否、道具機械の精粗等に由りて、其生産物の分量及び性質に大なる差等を生ずべし。社會主義者は労働のみを以て價値の唯一要素となし、自然及び資本の同じく價值構成に與かることを否認する所の學理上の謬見は、今や集産制の實行の上に於て、自然及び資本を労働の價値決定に就て、如何に取扱ふ可きかに就て大困難に遭遇す、是亦因果應報の理に合すと謂ふ可き歟、阿々。

蓋し集産制の公權は、各耕地、各鐵山、各工場に就て一々平均單位の労働を算定し、自然的條件、原料又は生産要具の優劣より來る生産の差等は之を計算し、控除して、各労働者をして斯の如き外部の事情に由りて其労働の報酬に寸毫の影響をも受けしめざらむことを期せり。故にジョ

ーレ氏は曰く『諸生産者は彼等の個人的に提供したる有効的労働の量に應じて、報酬を受くべし。或る一の鑛山より一の労働時間に於て採掘せられたる石炭の量及び性質は如何に不同なるも、労働者は到る處に於て、それがアンザン (Anzin 炭坑の名以下同じ) たり、ドウカツヅヴィル (Decazville) たり、又はベッセーデユ (Besseges) たるを問はず、坑業に正常的に使用せらるる労働の時數に由りて計算せらるゝ一の報酬を受取るなるべし。故に諸労働者間には、或は彼等の働く所の工場又は其使用する機械に由り、或は彼等の加工する所の原料に由りて生ずる所の豫先的不平等あること無し』と。言何ぞ容易なる、余は其事の甚だ行ひ難きを見るなり。(Jaures *Organisation socialist, Revue socialiste*, août 1895, p. 154)。

労働の平均単位を見出す爲には、各種の労働に就て其烈度及び能度の社會平均を見出すを要し、更に労働を補助する所の自然的條件原料及び生産用具の差點より生ずる豫先的不平等を修正するを要するや前述の如し、而して此等の複雑困難なる仕事は集産制の公權の代表者及び其吏員に由りて爲されざる可からず。彼等は果して精確に機敏に公平に此任務を遂行し得べきや。夫一官廳内に於ける局課の小範圍に於てすら、吏員の配當其宜を得るは難し。然るに今や全國を通じて山林漁場獵地田畝菓園牧場鑛山工場等あらゆる生産の場所に人民を配置し、其要する所の原料道具機械車輛牛馬等を配布し、其生産物を審査し謂ゆる社會平均單位に由りて、一は以て労働の報酬

を決定し、一は以て生産物の價值を決定せんとす。ジョーレー氏は豫先的不平等なし (aucune inégalité préalable) を言ふと雖も、余は繼續的累積的不平等 (inégalité successive et accumulative) の生せんことを深く恐るゝものなり。

且つ自然的條件は絶えず變化し、氣候の變、水旱地震海嘯又は獸虫の害の起るあり。而して原料及び生産要具特に機械の如きは發明發見及び生産方法の改良に由りて亦絶えず變化すべし。果して然らば昨日の價值平均單位は今日のそれと同じからざることあるは自明の理なり。此故に集産制の公權、否、其吏員は絶えず一方に於ては勞働の報酬の改定を爲すを要すべく、又他方に於ては公共倉庫に既に貯藏し在る生産物を従前の價にて成る可く早く賣却するを要すべし。然らざれば同種の物品にして、其藏入の前後に由り價值の差異を生ずることとなるべきなり。

尙ほ茲に考慮すべきは、集産制の社會に於ても、勞働者は必ずしも皆公共倉庫に貯藏せらるべき物品の生産者に非ざる一事なり。多くの人々は新生産物を生ずることなき手工を爲すあるべく又他の多くの人々は無形的性質の勤勞を爲すあるべし。裁判官、行政官に相當する人々は唯國に對する勤勞を爲すのみなるが故に、其俸給は國が其公費を支辨せんが爲めに、他の一般の勞働者の報酬より控除する勞働手形を以て支拂はるべし。然るに此等公吏の外に、個人に對して勤勞を提供する種々の勞働者あり。集産主義の忠實なる履行の爲には、彼等の報酬を當事者の相對にて、

需要供給の關係に従ひ定めしむべからず。彼等は宜しく他の總ての人々の如く行政府に從屬すべきものなり。此法則は船員鐵道吏員遞信事務員の如き公務に従事する人々に對しては至て簡單に適用せられ得べく、即ち彼等は其勞務に對して行政府より報酬を受くべきなり。次に個人に對して直接に勤勞を供する人々、例へば馭者、理髮人、荷擔夫、洗濯屋、看護人、建物の小修繕を爲す人、又は個人使用の物品の修理を爲す人の如きも、亦彼等の勤勞の價值を認定する權限を有する行政府の指定價格に由りて支拂はるべきものなりとす。自由職業即ち音樂師、醫師等に對しては、此と同一の法則適用せらるべし。然れども或る集産論者は彼等を寧ろ公吏として取扱ひ、其勞務に對しては行政府より公定の俸給を與ふべしと主張せり。唯茲に困難なる問題は此等公吏對人勤勞者及び自由職業者の勞働の價值平均單位は如何にして計算し決定すべきか、又各人の勞働の烈度及び能度は如何にして算定し、以て其實際受くる所の額を決定すべきかの點なりとす。蓋し此點は集産論者の依然默して語らざる所、古人曰く能はざるに非ざる也、爲さざる也と、余は彼等に對して曰はんとす、爲さざる也、且能はざる也と。(未完)